

## 俊寛：小説

著者	岩田，武，[イワタ，タケシ]
雑誌名	龍南
巻	2 1 9
ページ	9 9 - 1 0 8
発行年	1931-11-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7039">http://hdl.handle.net/2298/7039</a>

# 俊 寛

岩 田 武

『……おぼろげにては船も通はず島には人も稀なり……島の中には高き山あり、とこしなへに火燃え硫黄といふもの充ち充ちたり、かるが故にこそ硫黄が島とは名付けたれ雷つねに鳴り上り鳴り下りて麓は雨しげし一日片時人の絶えてある様なし』——平家物語——

『眼に遮る物は燃上る火の色耳に滿つるものは鳴下る雷の音、肝心も消ゆるばかりなれば一日片時堪へて有べき心地せず……昔は鬼のすみければ鬼界が島と名付けたり、今も硫黄の多ければ硫黄の島と申しける』——源平盛衰記——

源平盛衰記も平家物語も都人士の讀物である以上悲壯を誇張する點に於て決して吝でない。邊土に對する都會人の懷惡と恐怖を除きさへすれば、風土記に出て來たさうな愛すべき島であるかも知れない。従つて鬼界ヶ島の流人達は決してそれ程窮迫した状態にあつたのではなかつたのである。

風土は……荒れた、あら削りの風物は勿論初めは彼等をおびやかした。又悲しましめた。總てはあさましさの一語に盡きてゐた。理智的な俊寛は成經や康賴が衣を反して寝る可憐な迷信を幾分の侮りをもつて見たのであるけれど彼白身も都の夢を見た時は頬骨の高くなつた蒼黒い頬に涙のあとを光らせ乍ら、再び夢の續くのを願つて暗闇に又目を閉ぢるのであつた。

俊寛は彼の娘と一諸の車に乗つてゐた。簾のすき間からは草鞋をはいた牛の足が春の陽に小さな砂煙りをあげてゐるのが單調に眺められてゐて、長閑な車の軋がそれにいつまでも和してゐた。

「あれ、不如歸が鳴きまする、鶯も」娘は呼んだ。

彼は耳をすました。いくら耳をすましても車の軋より外に聞えるものではない。併し彼の心の中には聞えねばならぬと信ぜざる何ものかである。彼は更に耳をすました。聞えぬ事は宇内第一の琵琶の妙手である彼の聴覺の敏感を誇る自尊心——人一倍強い自尊心が許す譯はなかつた。氣の若い彼はやつ氣になつて耳をすました。遂に彼はこの少女の言葉を否定せうとして童女を見下すと、その顔は意地の悪い堅い表情を浮べた成經の顔であつた。

彼は不愉快な思で眼と轉じた。小さい窓に限られた小宇宙は、春霞渡る中に櫻が、眞珠の様な櫻がどこまでも斷續してゐた。

「佐久良。佐久良」

目覺めた俊寛はその語を發した名残を口邊に感じた。彼は耳にたまつた涙を指で弾き出した。

眞黒な闇に雷の様な噴火口の音やら、激しい成經の鼾が聞えてゐる。その様な夜は俊寛は決して眠れなかつた。

かうした中に彼等の生活は次第に悲慘からは縁遠くなつた。便船は月に一度は必ずきた。都の便りをのせて。疏黄は都に必要な物資であつたのである。相當に豊富な什器も、食糧を便船の來る毎に來ぬ時は無かつた。その上に有難い事には階級意識はこの島にも流れ込んで、金錢とか彼等がやがて持つであらう權力が島民と使役する事か出來だした事である。初めの春が來た時は彼等の住居は岡の上に建てられ芭蕉の植えてある前栽に粗末であるがこざつぱりした都風の形になつた住居を形成してゐた。

島民は之を屋形と呼んで、田舎人らしい虚榮はこの優秀な人々の屋形へ參る事をひそかに誇としてゐた。

頭の白くなつた島守は風激しい夜生臭い魚油の燈の下で、黒い酒を飲み乍ら唇の赤いまだあどけなさの失せない娘の千鳥に屋形の人々の事やら、傳へ聞いた都の話をして聞かせた。既に都に都人に漠然たる憧憬を抱いてしきりに何かを夢見てゐる娘に。

## 二

すぐ夏が來た。この島ではそれは比較的過ごし易い季節であつた。微風は絶える事はなかつたし一日一度は必ず夕立があつた。

金屬性の様な黒潮の反射の光も野性を獲得した彼等は眺めてゐる中に今迄味つた事の無い元氣が湧く様であつた。激しい太陽は千鳥の成長も躍進的にした。彼女は目蓋の裏に、頬に、それからどことはなしに薄桃色を加へだした。

屋形ももう殺風景でなかつた。この新しい色彩を加へたからである。

### 三

屋形の中では、俊寛が次第に孤獨に憂鬱になつた。

彼は常に二つの人格の軋に苦しまされてゐる様な人間であつた。肥満した容貌の醜い男で、濃い眉も高い頬骨も彼を無感情な武骨者と思はすに充分であつた。彼は容貌の如きは氣にかけぬ様な風をしながらも、絶えずそれが氣になつてゐたのである。それに加ふるに、彼はあくまで細かい傷き易い神経をもつてゐた。心の優しい彼はともすれば動かされ易くなにかにつけて平靜を亂す事も多かつた。彼の生活は決して面白くなかつた。マゾ的傾向をもつた成経は、俊寛を窘める事によつて大不平のはけ口を見出した。成経は俊寛が一語發する毎にその語の否定、誤の指摘、非難、横槍入れを以て終始した。常識に於て遙かに優れてゐる俊寛に對する成経のそれは大抵の場合無意味な根據のない駄辯にすぎなかつた。併し弱氣の俊寛はあくまで神経の太い成経の激しい壓迫に對して敵意を示す事は出来なかつた。彼は間の抜けた——彼自身では常にその場合自分の顔をそう感じた——顔に成経の言葉を不得要領な苦笑で無感動らしくうけ流し乍ら神經家の常として半時間程してから次第に腹が立つて來るのであつた。彼は或少數の人々からは好かれたけれど、それ以外の人からは好かれなかつた。不幸にして成経と康頼は後者であつた。都ではそれは何等苦痛ではなかつた。俊寛の好き好かれる人々は、みやびな人と稱されてゐたから寧ろ誇りであつた。が鬼界か島ではそうはいかなかつた。それは如何にもフェータルな苦痛であつた。二人は次第に俊寛を除外した。俊寛が行くと低い聲で話し合つてゐた二人が、色々黙する事も珍らしくはなかつた。熊野詣も二人だけで行く場合も多かつた。割合優しい康頼は初めの中は誘つてくれましたが成経はそんな時は明らかな惡意で康頼を促した。俊寛は次第に孤獨に憂鬱にならざるを得なかつた。彼は一

人で熊野詣に、岩頭に色々な空想にふけりながら、永い時間を過してゐた。

## 四

この暗澹たる社會へ華かな千鳥が入つて來たのである。体裁をつくらふ俊寛はつとめて平然としてこの娘の出現を見流した。彼の教養、若しくはその教養を浮世離れたこの島までもちこそうとしてゐる自尊心が康頼や成經の様なあからさまの喜悅を面にあらはすのを許さなかつたのである。併しこの異性の出現によつて最も心を動かしたのは、やはりナイーブな神經家であるだけ俊寛であるに違はなかつた。彼は康頼や成經が千鳥の前に於て冗談らしく誇大した愛の告白、或場合には道徳的に固い俊寛の眉をひそめさす程色情的なものであつたが、彼はそんな時いつも苦つぽい笑を洩らして横を向いてゐるだけであつた。横は向いてゐても、彼女の一舉一動は視野の外れに焼きつく様でつた。彼等が哄笑しても、それは決して俊寛の氣分に一致しなかつた。彼は苦笑をつゞけて段々深い弧獨感の中に沈んで行くばかりであつた。

千鳥を喜ばすのは靜かな俊寛の物語り風の言葉では少くて、成經の色情的な冗談である。彼はそれに對する泣き聲の様な彼女の笑とか、鼻にかゝつた甘へた彼女の聲が聞えてくる時は書物を読んでゐても氣かつくと頁は徒に進んでゐたけれども、一語として頭に残つてゐるものはなかつた。救を求むる様な氣で妻の松の前の消息を見て、可憐な面影を憶ひ出す事もあるけれど、千鳥の鼻にかゝつた甘へた聲がすぐそれを掻き消して、只チラと妻の消息の文の數字だけが記憶に残つてゐる事もある。彼は處女の嬌羞を示さぬ、彼女をあさましと考へるに努めた、が、それは妬ましさを抑へるに似た努力であつた。

彼は千鳥に平易な文學宗教の話をして聞かせた事も一二度はあつた。それは寧ろ文學宗教に何等の知識を持たない成經に、聞かせてゐる調子がないとは言へなかつた。が可成聰明だけれど無智な彼女は何等の感動を示さぬのみか彼女はこの愉快でない醜い男に對して明かな侮蔑を示しだした。俊寛は水鏡に寫る自分の醜さに對する彼女の嫌惡を悲しく承認しながらも次第に彼女を憎む事に勉めた。そうして幸か、不幸か、實際に少しづつ彼女を憎める様になつたのである。

「都はどんな所だらうか。」

「都はですな、家が建ち並んで春は柳櫻をこきまぜて……秋は紅葉の錦……」成経は美辭に苦しみ乍らつゞけた、「そこには貴女の様な美しい女と僕の様な男とが一つ車に乗つて、こふいふ風に、こうやつて……」成経は千鳥の傍によりそつて、彼女を抱く眞似をしてみせた。

「私が都に行つたら都の人は何といふだらうか。」

「そりや美しい人といふよ」康頼の充分な自信が、その語を落着いた調子に發せしめた。

それが事實でない事は三人とも分つてゐた、康頼は色好みとしての方便からどんな噓でも吐いた。

俊寛は千鳥のいつもの甘えた聲で目をあげた、彼は彼女を見た瞬間猫を連想した。ピンとひげを生やして赤い口をあけて囁いた猫を、然しそれはすぐ微笑になつた。

「都はこうして楽しい所だ」成経は千鳥の兩手を取り乍らチラと俊寛を見て更に挑戦的につけ足した、「俊寛殿そうでせうが」俊寛は次第に成経の眼の光が憤らしくなつた。「そりやそればかりで楽しい人もあります、併し中にはそれ以外に楽しみを持つてゐる人もあるかも知れませんよ。」

「無いです。それは女に惚れられぬ人の泣き事です。女をものにするには美とか藝とか何とかの理屈はなしで馬鹿になつて眺めてやらにやいけんです。……それに大休島で本を読むなんて事は止めませんか。」

俊寛は成経の力をこめた正硬な語尾がゾツとする程厭はしかつた。大抵の場合それは僅かにすゝめる形をとつた強要であつたら、それにしても彼は成経が感じる事の出来ない美意識を只戀情の道具と做す心が淺ましく思はれた。だが大人しい俊寛は面と向つてこの意地惡の成経に自分の唯一の樂しみの讀書を非難するに對する抗議を言ふさへ好ましくなかつた。

「でも無教養娘と文學の間には何等關係はなさそうですね。」

しばらくしてから俊寛は皮肉ともつかぬものをつけたした。

「おい誰かどお前の悪口を言つてるぜ。」

「誰——が——で——す——。」

彼女の聲は長く矯憤にふるへてゐた。そこには害はれた威嚴に對する女王の憤りがあつた。

## 五

秋らしくなつて海に浸つても、水の感觸は只うすら寂しい季節になつてゐた。康頼が木の小片に和歌と刻んで流そうと言ひ出した。京へ着くかも知れない、京へ。第一日に彼等は刻むべき和歌を作る事に没頭した。俊寛は初めて靜かな屋形の中に、幾分の優越を以つてのびくと藝術三昧の境地に入る事が出来た。次の日彼はこの境地に全然色言の成經に對する侮蔑の色を、時として閃かし乍ら始めて浮き浮きした氣持になつたのである。

思ひやれしばしと思ふ旅だにもなほ古郷は戀しきものを。俊寛は多分の不平をこの自作に持つてゐた。

「段違ひにい。」

俊寛は久し振に與へられた康頼の暖い言葉に涙ぐんだ。彼の抱いてゐたとも言へる輕い彼等に對する侮蔑は鋭く彼の心を刺した。

「いや年の功で」俊寛はどもりながら嫌遜とも卑下ともつかぬものをあはてゝ加へた。彼は一番年長者であつたのである。

「氣は若う持たんといけんあ。この場合。」

始めて先刻から顔をこはばらしてゐた成經が叫んだ。

俊寛は彫刻をしながら半時間程してから次第に不愉快になつた。

## 六

秋も半になつた。無聊な彼等は晝寢が習慣になつてゐた。俊寛はふと都の夢から覺めた。彼の寢覺はいつも、不快であつた。

いさなく眠つてゐる二人を見ると俊寛は意地にもう眠れなかつた、彼は窓から外を見ると紺碧の海に信天翁とも見紛ふ白帆が一つ浮んでゐる。

既に數度目に白帆であるが、胸をつかれる様な感は第一回の時とは變らない。船にはうれしい便りがある。その音信の結果は三人がまた暗い燈影でボツ／＼かき口説きあつて泣くのに終るのであるが。

併し都の役人風の者と雑色風の者が數名砂濱から赤土と石だらけの島のすそ野に登つて來やうとするのを見た時俊寛は激しく胸をうかれた。身体全体がこそばゆく、又驚く程平靜であつた。平靜であり乍ら頭は色々の事都、花、妻、平家……等と次々に電光の様に浮び上つてどうしてもまとまりがつかず目の前の二人を起すといふ長き簡單な普通な事にどうしても氣がつかかなかつた。彼等は一散に坂路をかけ下りた。肥つた俊寛は大きな息をつき乍ら、二人のあとから走つてゐた。齒を喰ひしぱり乍ら、泣き乍ら、笑ひ乍ら。

遂に三人の許される時が來た、平家に對する恨も何もなかつた。康頼も成經もさすがに今は俊寛を除外する事はなかつた。三人は目に涙を浮べて口邊に泡を溜め乍ら、お互に相手が聞いてゐなくても、相手が喋つてゐるのにつゞけさまに言葉を發した。天も細かいぬかの様な雨を降らしだした。

一行は屋形に入つた。

## 七

俊寛は涙をいつまでも滲ませ乍ら信心深い母の事どもを思ひ出して、熊野詣に細雨の中を出かけた。それは一仕事であつた、彼は何度亡り轉んだか分らなかつた。

俊寛が歸つて來ると屋方は一脈の險惡なぎこちない様子が漂つてゐる。彼は徐に座つてうつむいたまゝそれとはなしに様子を看取した。康頼が千鳥をつれて都に歸り度いといふのである。それに對して副使の妹尾太郎「あるまじい事」とて許されないものである。正使の基康は許す氣はあつたが、然しそれは幾分後めたい事である以上、彼は副使と甚だしく紛争するといふに至らな



いのは勿論である。俊寛はこの際自分等の歸洛を危くする康頼の強情を惜んだ、彼は今までの康頼の千鳥とふざけ合つてゐた風景をすばやく算へあげてゐた。これは決して少い度數とは言へなかつたけれども、この若い二人をこうまでしばらくの間に結びつけてゐたと考へるのは幾分の不思議であつた。彼は成経をぬすみ見た。成経は堅い何等の表情を浮べぬ顔をこはばらしてゐた俊寛はこの顔が嫌だつた。寧ろ恐しかつた。併し成経の冷やかな表情の中には、二人の苦しい氣持を是認してゐる色が明かに動いてゐる。この負けず嫌ひな成経が、そして始めの中はあれ程康頼に負けぬ様に、千鳥の御機嫌をとつた彼が……。それは通人を以て自任してゐた俊寛の自尊心を甚だしく傷けた。彼は副使の青白い意地悪な如何にも下級役人らしい顔を見て、本能的な憎惡を感じながらもその言ひ分に何か小氣味よいものを感じてゐた。

突然すゝり泣きの聲にふり返つて見ると、いつになくうひうひしい千鳥が伏目になつて髪を慄はしてゐた。頭にさした花の花瓣が柔かく速かに動いたと思ふと、涙が大きい目から前の羹の中に落ちた利那が俊寛に眺められた。彼はふとこの田舎娘の涙を汚ないものゝ様に意地悪く見たが、同時にこみ上げてくる満身の同情も否む事は出来なかつた。それは丁度自分の娘に對する親の慈悲に似たものである。彼はとびついて慰めたかつたと言ふ文句を考へられなかつたし、氣の細い彼は今となつては康頼に幾分の氣兼ねあつてそうは出来なかつた。

彼はさつきから次第に此千鳥が女らしい自分より男らしい康頼を選んだのは尤もだ。寧ろ賞めてやり度い氣がして來たのである。美々しき高名の色好みの女房が康頼に打ち込んだ事等を考へ合し乍ら。役人等は考慮の時日を興る爲明日を期して船へ歸つた。その夜は康頼と千鳥は最も苦しまねばならぬ夜であつた。康頼は久しぶりでしみんと俊寛に話しかけた。俊寛は康頼の千鳥に對する戯れを一時的のものと考へてゐた自分の卑しさに、暗闇の中で顔が赤くなるのを覺えた。二人は以前三人でよくやつた事のある、次から次への妄想を恣まゝにした。

「毒蛇が妹尾をかんであいつ奴狂ひ死してくれゝば。」

「おびき出して噴火口へ人知れず落してやり度い。」

の様な言葉は何度となく相當に眞實性を帯びた迫力を以て繰返された。

## 八

夜が明けた。雨はまだ嫌の様に降つてゐた。濱邊に浮んだ大きな船は影繪の様にかすんで見えた。だらりと下つた帆はいかにも重そうである。俊寛は屋方の側の芭蕉の下で濡れ乍ら何かと口吟んでゐた千鳥が屋形の隅を廻つて歩いて來た。

「お早やう。」

「お早やう。」千鳥は割合しつかりして冷淡な調子で言つた。それには幾分すてばちな氣配が明かに感じられた。

「雨が止みませんね。」

「あなたの好きな雨が……併し雨は私の心にも降つてゐます。灰と煙を混ぜた様な雨は」こゝで彼女の聲は涙聲となつた。「私の胸の中に降つてゐます」千鳥の聲は冷い微かな敵意を含んで靜なものであつた。

俊寛は激しい感激に默然としてゐた。

彼が副使を殺害する決心は、この時から次第に形をとり始めた。

彼は藝術家であつたゞけに空想家であつた。空想家であつたゞけ犯罪性があつた。神經質であつた代りには險しい疳と強い体力があつた。彼は巧みな方法で味尾を殺害してしまつたのである。彼は慄える足をふみしめ、こはゞつた微笑を浮べ乍ら役人と康頼の前で總てを物語つた。それは苦しい努力であつた。彼は只熱にうかされた様に空をみつめて叫んだ。康頼と千鳥と成經と都へ召し歸せられない。自分は上使を殺した罪によつて改めてこの島へ流れだものとして残れば上使の役目も立ち……彼は自分を見つめてゐる千鳥の眼を視野の外れに感じて涙ぐみ乍らも昂然として述べた。

## 九

別れの時が來た。俊寛は豫期に反して康頼と千鳥が自分の言を何らためらふ事なく受入れ、案外の無感動な冷淡しか示さないのにだまされた様な呆氣なさと同時に砂を噛む様な後悔を感じたけれど、流石に最後に康頼が彼の手を握つて頂いた時は彼の心

は柔かくとけて行くのを覺えた。それは單に嬉しさに似た氣持である。俊寛は最後に思ひきつて、千鳥の顔を正面から見た。これ程この女の存在が彼の人生の大部分であつたに關らず、彼は今迄何度正面から彼女を見た事かあつたらうか。俊寛は數枚の紙を彼女に都へのことづけとして頼んだ。それは彼がこの島に居る時に生みだした最大の藝術品といつてよかつた。琵琶の妙手の彼は康頼や成經の様に俗歌を口から耳へ覺えた様な原始的な方法ではなく、樂曲と紙に記す法に長じてゐた。激しい構想も變則な興奮も皆彼が彼女のどう惱まされたか、その惱まされるのをどんな氣持で待つたかを如實に語つてゐた。千鳥は何等の感動なしに横を向いたまゝ受取つた。俊寛はもう一度彼女を見た。そんな決して美しい顔ではなかつた。都の噂高い女房の様に教養と理智が滲み出して光つてゐるといつた様な美しさは、何所にも無かつた。つり上つた目と眉。廣い上唇、野性を表してゐる開いた小鼻、俊寛は一々欠點を算へあげた。

一体この女はどこが美しかつたのだらう。彼は心の中で叫んだ。けど大した實感を伴つてゐる様ではなかつた。俊寛は何も考へる事の出來ぬ、とりとめない漠然たる氣持の中に頭の一方から煙の様に滲み込んで來る孤獨の淋しさを感じ乍ら康頼が昨夜しきりに清盛へきつと俊寛の赦免を頼んでやると繰返したのを思ひ起し自分の歸洛を相像する事に努めてゐた。

## 十

船は出た。船の中の彼等の姿が見えなくなつてから俊寛は始めて激しく泣いた。それは一しきり氣の狂ひ相な苦しみであつた。數ヶ月たつた。俊寛はあの時の自分——千鳥が、自分を憎んでゐた千鳥、又自分も憎まれる事により……いや自分もやはり憎んでゐた彼女が自分の影響をうけた事によつて發したのだと思はれる文學的な只一語實に幼稚なものだつたがそれに感じて、一方には成經に對する意地もあつたにしても、人まで殺して彼女の幸福をはかつてやつた自分——人のよい英雄主義者、自己のなかつた弱氣者——を思ひ出す時は未だ一度として激しい憤りの發作に燃えて什器をたゞきこはさなかつた事はなかつた。

數年たつた。

俊寛は今は無下に卑しく薄暗い燈の下でほそぐと白髪を抜き乍らあの時の自分を思ひ出して苦つばく笑ふだけである。